



中高生とともに差別と闘う

『人と関わるのが好きになれる学習』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



夏からあと

この夏は他にも、部落解放文学賞で拙著「おかえり」が佳作をいただき授賞式にお招きいただいたり、隣県で開催された人権集会に高校生を連れて参加することができたり、また昨年度に引き続き四国朝鮮学校交流フェスタに塾生を連れて参加したりと、慌ただしくも充実した日々を過ごすことができました。ここで詳細について話し始めるととてもないことになりそうですので、詳しくはHP(下記)をご覧くださいだけばと思います。

その一方で勤務先でも、二期に入り人権学習が再開されました。三年間受け持ってきた中学三年生への最後の学期です。三学期は受験や卒業もあり実施できないため、実質二期が最後の学期となります。どうしても熱が入ります。

「最後」に向けて

最後に寄せて計画していたテーマは二つ。一つは就職差別について。もう一つが結婚差別についてでした。

皆さんは、「就職差別につながる」とされる十四項目」というのはご存じでしょうか。就職の採用試験を受ける際、現在はエントリーシートといわれることが多いですが、応募用紙を提出することになります。その際、採用の判断のため、本人の能力とは関係ないと思われる項目が調べられることがあります。例えば、本人の本籍や家族に関することなど

について。それらについて調べること、本人の働く能力と何か関係でもあるでしょうか。それで採用の可否が決められたのではなかったものではないでしょうか。とはいえ厚労省に則った様式ではなく、独自の応募用紙を使っている企業が半数にのぼっていることも事実です。そういった不当な現状があるということについて、これからの民主主義を担う人材として知り学んでおこうということでも学習するわけです。

またこの学習で同時に考えさせておきたかったのが、次のステージに入ってから、自分の身の振り方です。分かりやすく言うと、次のステージで見知らぬ人に、中学時代に学んできた人権について、何をどう伝えるのかということです。場合によっては、人権というワードを避けたり、嫌ったりする風潮があります。そこをどう越えるかということですが、そこを越えない限り、様々な人権課題の一つ一つを越えていくことにはならないと考えるからです。

この授業で最後にした質問はこうでした。

「これから新しく出会う人に、中学時代の人権学習を伝えるとすれば、あなたはどのよう伝えますか。何を伝えたいですか。」

この回答が意外と面白かったもので、いくつか紹介させていたが、これから、これまで人権について学んできた中学生の感性を感じていただければと思います。

人と関わるのが好きになれる学習

「私は人と関わるのが好きになれるって伝えたいと思います。大雑把に言ってしまうけど、私ならきつとそう言います。二年半人権を学んできて、いろいろな発見や考えが生まれたりしたけど、なかでも私が特に記憶に残っているのは、人権学習によっていろいろな人と関わったことです。人権の話をしているとき、いつもより少しでも「自分語り」として自分のことを話してくれたり、今まで話したことない子と人権で話をすると、思ったより意見が似ていてちよつと仲良くなれたり、逆にまったく違う意見でも真剣に話を聞いてくれたり、そういった人権を通して人のあたたかさにふれることができる、みたいなことを伝えていきたいです。」

一番初めの発言ですが、ほお、そうきたか！とすごく嬉しい気持ちになりました。

「人と関わるのが好きになれる学習」なるほど、確かにその通りです。

この学習は当初、発言したい者が手が挙げて発表するというスタイルでした。しかし、二百人もの前で誰もが発表できるかといえ、やはり限界があります。しかも複数の小学校から入学しているため、知らない子もいます。そこで、六つあるクラスを解体して小集団をつくり、そこでまず発表をするという形に変えました。そこには知らない子だっています。でもそれが新鮮で、出身小学校を越え、クラスを越え、

新しい友達ができる場として子どもたちの中に浸透していったのです。

自分たちで編み出す

それでも、大勢の前で発表するというハードルはやはり高いままでした。この問題が、いつの間にか生徒会人権委員会で話し合われたのです。

課題として挙がったのは、

- ・ 挙げる手が重くて挙がらない
- ・ 一人だけで立つことに抵抗がある
- ・ 一人だけで発表することが心細い
- ・ というものでした。それらを克服する新ルールを自分たちで編み出したのです。それが、
- ・ 小集団の中で手を挙げるだけの役割の人がいてもいい
- ・ 発表するとき小集団みんなで立つ
- ・ 立った小集団の中で何人が発表してもいい

というものでした。これが発言の活性化につながりました。自分とは出身小学校が違う子とのつながり、違うクラスの子とのつながり、そこで作られていく新たな出会い。ややもすると、生徒指導的な観点から、子どもたちの関係性を分断すること、日々起こる問題を最小限に食い止めようとする風潮がありますが、それとは真逆の発想です。でも子どもたちは、それを純粋に、プラスに受けとめ実現していききました。それがこの発言となり、聴いていた多くの子どもたちの共感を呼んでいったのです。(つづく)